

「会計研究の最新動向に係るワークショップ」 ワークショップ報告

1. 目的・活動内容

会計研究は、ここ20年ほどの間におおきく様変わりした。かつては、財務会計・管理会計の両領域とも、文研に基づく規範的な研究が中心であった。しかし、財務会計の領域では、近年、ファイナンスなどとの融合が進み実証的な研究へとシフトした。また管理会計の領域では、フィールド調査の重要性が叫ばれている。本研究では、こういった会計研究の最新動向に触れる場を提供し、ワークショップの個々のメンバーの研究のヒントを得ることを目的としている。

表 2020年度「会計研究の最新動向に係るワークショップ」研究会一覧

No.	項目	内容
1	開催日	2020年12月20日(日)
	タイトル	会計情報の信頼性—測定されるべき属性と測定値の誤差—
	講師(所属)	大雄 智(横浜国立大学教授)
	参加人数	12人
2	開催日	2021年2月4日(木)
	タイトル	1. 履行価値による引当金の測定 2. 暗号資産に関する会計処理—各プレイヤーの論点—
	講師(所属)	1. 赤塚 尚之(滋賀大学准教授) 2. 村上 翔一(敬愛大学専任講師)
	参加人数	12人
3	開催日	2021年2月23日(火)
	タイトル	1. 日本企業の財務制限条項における利益指標の利用実態 2. 経営者予想の精度とのれん
	講師(所属)	1. 中村 亮介(筑波大学准教授) 2. 奈良 沙織(明治大学准教授)
	参加人数	14人
4	開催日	2021年3月11日(木)
	タイトル	1. 収益という会計用語に関する研究—「収益」という用語は、いつから、どのように使われてきたか 2. 内部統制の問題と損失認識の適時性との関連性
	講師(所属)	1. 川島 健司(法政大学教授) 2. 大橋 良生(会津大学短期大学部准教授)
	参加人数	12人

2. 研究会概要

■第1回 研究会

開催日：2020年12月20日(日)

会場：オンライン開催(Zoom)

報告：会計情報の信頼性—測定されるべき属性と測定値の誤差—

報告者：大雄 智（横浜国立大学教授）

概要：本報告は、不確実性への慎重な対処という観点から会計測定における原価配分の意義と価値の見積りの役割を検討し、財務報告の目的を投資家の意思決定に有用な情報を提供することとしたうえで、会計情報の信頼性にてらして現行の会計基準が抱える課題を明らかにすることを目的としたものである。不確実性への慎重な対処、会計測定における誤差、信頼性ある情報の規準、のれんの会計処理、条件付対価の会計処理、原価配分の意義と価値の見積りの役割などの論点について論じられ、最後に今後の検討課題が示された。

■第2回 研究会

開催日：2021年2月4日（木）

会場：オンライン開催（Zoom）

第1報告：履行価値による引当金の測定

報告者：赤塚 尚之（滋賀大学准教授）

第2報告：暗号資産に関する会計処理—各プレイヤーの論点—

報告者：村上 翔一（敬愛大学専任講師）

概要：第1報告は、国際会計基準審議会における引当金に係る議論について、最新の概念フレームワークと整合的な基準のあり方を検討したものである。まず引当金をめぐる議論の周辺事情と問題意識が明らかにされ、次いで現行の国際会計基準第37号の概要と問題点が整理され、そのうえで履行価値による引当金の測定の在り方が議論された。第2報告は、暗号資産のありうべき会計処理について検討したものである。まず暗号資産の会計問題の検討に入る前に、歴史・用語・取引に関わるプレイヤーなどが整理され、次いで暗号資産の取得時および保有時の会計処理、コンセンサスアルゴリズムの会計処理、ハードフォークの会計処理、ICOの会計処理などについて検討された。

■第3回 研究会

開催日：2021年2月23日（火）

会場：オンライン開催（Zoom）

第1報告：日本企業の財務制限条項における利益指標の利用実態

報告者：中村 亮介（筑波大学准教授）

第2報告：経営者予想の精度とのれん

報告者：奈良 沙織（明治大学准教授）

概要：第1報告は、日本の財務制限条項において用いられている利益指標を明らかにしようとするものである。Li（2016）に倣い仮説を構築し検証した結果、投資制限条項が付されている企業ほど利益指標にEBITDAを用いる傾向にあることが明らかにされた。第2報告は、経営者予想の精度とのれんの減損の関係を明らかに

しようとするものである。Goodman (2014) に倣い仮説を構築し検証した結果、経営者予想の精度が低い企業ほど M&A 後にのれんの減損を計上する傾向があり、また M&A の公表後 5 年間の長期リターンを見た場合、業績予想の精度が低い企業ほど株価リターンがマイナスになることが明らかにされた。

■第 4 回 研究会

開催日：2021 年 3 月 11 日（木）

会 場：オンライン開催（Zoom）

第 1 報告：収益という会計用語に関する研究—「収益」という用語は、いつから、どのように使われてきたか

報告者：川島 健司（法政大学教授）

第 2 報告：内部統制の問題と損失認識の適時性との関連性

報告者：大橋 良生（会津大学短期大学部准教授）

概 要：川島報告は、収益（revenue）という語の使用法の多様性や曖昧さを明らかにし、当該用語が生成された起源を特定化することを目的としたものである。実際の有価証券報告書における当該用語の利用実態が明らかにされ、さらに日本の会計実務における収益という用語の起源は、凶師民嘉による鉄道会計に対する複会計制度の建議と revenue の翻訳によるとの主張がなされた。続く大橋報告は、内部統制の問題を開示している企業における損失認識の適時性条件付保守主義を問題を開示していない企業との比較を通じて分析することを目的としたものである。内部統制問題開示企業では問題不開示企業と比べてより適時的な損失認識が行われていることなどが明らかにされた。

担当：山田康裕（本学経済学部教授）